廣島大學圖書之印

中國文學に於ける融合性

斯波六郎

本篇は、昭和二十八年十二月十三日、広島の「二日会」第七回定例会に於て行つた講演の速記録である。標題の如き問題は、学問的立場からは、そう軽軽に論断出来るはずのものではなく、私自身も今猶、此の問題を深く追究し得ておるわけでもない。ただその会の性質上、厳密なる学術的講演をする必要もなかつたので、軽い気持で、思いつきを話したまでのものが、本篇となつた次第である。だから読者諸氏も、軽い気持で読み捨てて下されば、それで結構である。がしかし、万が一にも、此の類の問題について精研しようとする人人にとつて、本篇が一片の捨石にでもなり得るならば、それこそ全く望外の幸である。

（三〇・六・二九）

私は、藤原さんに頼まれましたとき、つい「中国文学における融合性」という題に、しておきましたものの、あとで考えてみますと、なか〳〵困難な問題でありまして、大変困つたことになつたと思つたのでありますが、今更致し方もありませんから、概略私の考を申し上げましよう。

文学とは何かということになりますと、大変な問題でして、昔からどこの国でも、大変むづかしい問題とされております。簡単な言葉で述べることは、とても出来ませんが、私は、文学というものは、要するに、人生をしみ〳〵と味わうものだと思うておるのであります。世の中のことを、ただ素通りするのではなく、よくかみしめて、その味をじつくりと味わい、そしてそれを文字に表わしたものが、文学作品であると思うのであります。だから、読者は作品を読むことによつて、またしみ〳〵と人生というものを、味わつてゆくのであります。

ところが、人生の味わいを表わしますのに、味わいを味わいのまま表わす行き方と、もう一つは、味わいの結果得たところの一つの真理と思われるものを、主義主張という形にしまして、その主義主張を述べるということに、重点をおく行き方とがあるかと思うのであります。前者を、私は低徊文学と名づけ、後者を主張文学と名づけておるのであります。中国の文学におきましして、いわゆる韻文の形、韻文と申しましても、普通われ〳〵が言う詩の外に、賦・詞などありますが、それらは大体、低徊文学であり、普通散文と言われておるものの大部分が、主張文学であります。そしてその主張文学というものは、とかく道徳とかあるいは政治などと、結びつきやすい性質を持つておるのであります。

文学と政治あるいは道徳との関係、これまた古今東西いつでも問題になるのでありまして、文学というものは、独自のものでなくてはいけない、ある

いは、政治と結びつくべきものだ、あるいは、道徳と結びつくべきものだ、といろ〳〵な意見がありますが、中国におきましては、漢の時代即ち西暦紀元前後一世紀、二世紀ごろの文学は、大体に於て、これは道徳に隷属した文学でありました。それが三世紀ごろに、魏の、あの有名な曹操、この人は主として武将として知られておりますが、それだけではなかつたのでありまして、実はすぐれた文学者でもあつたのですが、この曹操とその子の丕、植との親子三人が中心になつて、非常に文学の鼓吹に力を尽したのであります。そのころに始めて純文学というものの価値が認められたのであります。曹操の子供の丕という人の言葉に、文学のいわば独立宣言とも言うべきものがありまして、それは、「文章は経国の大業、不朽の盛事なり。」というのであります。この言葉はあの西洋の「命は短いけれども、芸術は長い。」ということと、ほぼ同じ意味だと解してよいでしよう。こういう風に、魏の時代から、文学は独立するようになつたのでありますが、その後また道徳、政治とからみあつて、ずつと変遷して来ております。もし文学というものが、何かとからみあわなくてはならない、極端に言えば、何かの奴隷にならなければならぬのならば、これは政治の奴隷になるよりも、道徳の奴隷になつた方がよいと思います。なぜかと申しますと、政治の奴隷になりますと、文学は政治の宣伝機関になるだけであつて、政治を批判することができません。しかし、道徳の奴隷になりますと、道徳の立場から、政治を批判することができます。政治の善い悪いに拘わらず、文学がただ政治の宣伝機関になつてしまいますと、世の中のより一層の進歩ということは、望まれません。ところが、文学が道徳に隷属しますと、ほかの立場から、即ち道徳の立場から、政治を批判することができますから、こうなれば、社会の進歩に貢献する所が多くなりましよう。

さて、文学は人生を味わうものだとして、それをどう表わすかという立場からみますと、さきに申した低徊文学と主張文学との二つに分けられるのでありますが、然らば、それを書きます時に、どういう題材をとるかという点から、これを考えてみますと、作者が、誰も気ずかない人生の一面を鋭く把握して、こういうところに、人生の本当の姿があるのだという風に、それを描写叙述しまして、そうして、それによつて、読者に人生をまざ〳〵と味わせる行き方が一つ。もう一つは、だれでも知つておることを、あるいは、前にもだれかが言つたこと、それをもう一べん取り上げて、今さらのように読者に人世を味わせるという行き方があると思います。つまり新しい材料を取つて行く行き方と、古い材料をもう一べん取り上げる行き方との二つがあるのです。ところで、中国の文学、何千年来の作品を通じて見られる中国文学の傾向は、どちらかというと、目新しい境地を開拓してゆくという積極的な努力は、あまり払われていないで、古いもの、従来もとりあげられたことを、何べんでも繰返して題材にしてゆくという、一つの特色を持つておるのであります。こういうように、前の人の言つたことを、あるいは、だれでも知つておることを、更に取り上げて、もう一べん人人にじかに味わせるには、どうしても表現の上で工夫をこらして書かなくては、人は相手にしてくれません。そこで、中国の文学におきましては、表現の工夫ということに、大変骨を折るのであります。

元来、文学というものは、たとえ新しい題材を扱うにしましても、表現の問題を抜きにしては、成立しないのであります。文学は、内容が主か、形式が主か、ということも、古今いずれの時、東西いずれの国でも、よく問題にせられるのでありますが、しかし表現の工夫を全然やらないものは、これは文学ではないのであります。文学の発達を調べた人は、だれでもすぐ気ずくことでありますが、文学のまだ十分進歩していない時代には、筋書き、つまり話の進みというものにのみ興味を持つておるのでありますけれど、それが相当発達しますと、筋書きよりも、いかに巧みに表現しておるかということに、興味を持つようになつておるのであります。

とかくわれ〳〵は、何でも思つておる通りに言えるもの、また、言う通りに書けるもの、という風に考えがちでありますけれども、実際は決してそう

ではありません。思つていることを、そのまま言葉で表わすなんてことは、殆んど不可能でありますし、また、口で話すその通りを、文章で表わすということも、殆んど不可能でありましよう。こういうことは、昔から中国人はちゃんと気がついていたと見えまして、

「書不盡言、言不盡意」（書は言を尽くさず、言は意を尽くさず。）

という言葉があります。これはよく引き合いにされる句で、孔子の言葉だとされておりますが、確かではありません。しかし遅くとも、西暦紀元前、一、二世紀ごろのものでありましよう。書いたものは、言葉を十分尽くして表わし得るものでなく、言葉というものは、思う通りを十分尽して表わし得るものではない、という意味であります。大変、味のある言葉でありまして、まことにその通りだと思います。

言語というものは、一一寸本筋からそれるかもしれませんが、言語というものは、自分の思いを表わすものでありますけれども、工夫をしないで使うと、かえつて意思を表わし得ないことになるものなのです。思う通りをこまかく、くど〳〵と言おうとすれば、かえつて言い尽くすことができないものなのです。私はバスに乗つて学校へ通うのでありますが、そのバスに—最近は目につきませんけれども—、何月何日にＤＤＴをまいたということを書いた表がかけられていましたが、その見出しが非常にふるつておるのです。それは、「予防消毒実施済表」と書かれてあつたのです、これはまことに至れり尽くせりの書きかたであるけれども、さて消毒するのに、予防でない消毒があるのでしようか。実施済とあるが、済まぬ実施ということは、どこにもありますまい。丁寧に言おうとして、かえつて要点をぼやけさせてしまつております。あるいはまた、バスの車掌さんがうるさく言う、「皆さまこれより路面が悪くなりますので、従つて車体の動揺がはげしくなりますから、お気をつけください。」これまたまことに至れり尽くせりでありますが、しかしこういう風にいわれると、車体の動揺するのは、何も道路が悪い為ばかりではなく、自動車その物も悪いからではないか、とやりかえしたくなります（笑声）。簡単に「車が揺れますから御注意ください」といつて、十分用がたされ、しかもその方が一層効果的であるのに、丁寧に言おうとして、長たらしくしゃべるものだから、言葉が稀薄になつて、肝腎の要点がぼやけてしもうのであります。こういう現象は、言葉だけではなく、法律などの文面でもおこることがないでもありません。いろ〳〵なことをすべて漏れなくきめよう、あれもきめ、これもきめ、また一ケ条の条文を書くにも、こういうことも入れ、ああいうことも入れ、という風に手を尽くしますと、かえつて落ちてしまうことがあるのです。いわゆる法の盲点をつくということは、そんな所から起るのではないでしようか。老子は「天網恢恢疎にして漏らさず」といつておりますけれども、これでは、「人網細細密にして必ず漏らす」となり、逆の現象が起つて来るのであります（笑声）。こういう風に考えますと、話すことも書くことも決して容易ではないのでありまして、正しく自分の思想や感情を表わそうとするには、どうしても表現の工夫が必要となつてくるのであります。ましてや、読者に美感を起こさせることを使命とする文学作品においては、尚更のことだといわねばなりません。そも〳〵、言語というものは、時勢が混乱しますと、知らず識らずの間に混乱するものでありまして、中国の例を見ますと、混乱した時代には言語も混乱しております。日本でも同じでありまして、戦後は非常に言語が混乱しております。戦後四種の新聞について、私は一箇月間ほど言い方の統計をとつてみたことがありますが、論説は非常に大切な文章でありますのに、どの論説の文章も申し合せたように乱れておると感じました—もつとも、最近はたいへん落着きましたけれども。言語なんかは、どうでもよいと思う人があるかも知れませんが、実はそうではありません。言語はその人の考え方と表裏の関係をもつものでして、言語が乱れることは、考え方の乱れておる証拠なのです。話が戦後のことにそれたついでに、戦争中に使つた面白い言葉の一、二について述べましよう。戦時から配給という言葉が使われ出しましたが、この言葉は、わが国でだれが使いはじめたのか知りませんけれど、実は中国で、三世

紀、四世紀、おそらく四世紀ごろ使われておつたようです。晋の時代に、王敦という人がありまして、天子の姫君を頂戴したのですが、その時つき従つて来た美人が、百餘人だつたと申します。ところが、やがて世の中が大いに乱れて、その美人の処置に困つたので、それらを部下の将士に配つてやつたということであります。そのことを歴史に、「これを将士に配給す」と書いてあります。これなどが配給という語の最も古い用例でしょう。もつとも公定価格はいくら、と書いてはありませんが（笑声）。それから最近まで牛田では、酒屋に「冠婚葬祭用酒配給所」という札が、かかつておりましたが、これも甚だうまいことを言つたものです。しかし婚は結婚、葬は葬式、祭はお祭りということは誰でもわかるとして、さて冠とは何かと問われて、元服のことだと答え得る人は恐らく多くはありますまい。まして元服の実際など知つておる人は殆んどないでしょう。また事実、むすこの元服だから、酒を配給してくださいと言つていつた人もなかつたと思います。これなどは、簡にして要を得た古い言語をうまく使つたのですけれども、いかにせん、冠はもう死語であつて、今の世には通用しないのです。ともかく適切に表現することは、なか〳〵むつかしいことです。

さて、中国の文学におきましては、表現の工夫を非常に重んずるということをさきに申しましたが、それはどういう風にすることかと言いますと、例えば、紀元前三世紀頃の作とされるものの中にこういう書き方があります。

増之一分則太長　　これに一分を増せばはなはだ長く、
減之一分則太短　　これより一分を減ずればはなはだ短し。
著粉則太白、　　粉をつくればはなはだ白く、
施朱則太赤、　　朱を施せばはなはだ赤し。

これは美人の背丈色つやを形容した一つの表現です。もうまつたく申し分のない背丈であつて、一分足せば長すぎ、一分へらせば短かすぎるくらいのほどよさであり、おしろいをつければ白すぎ、紅をつければ赤すぎるほどの美しい自然の白さと、自然の色つやを持つているという意味であります。

この文句を三世紀ごろ魏の作家がまねして、更に一層工夫をこらしたのが、つぎの書き方であります。

穠纖得中、　　穠纖中を得、
脩短合度、　　脩短度にかなう。
芳沢無加、　　芳沢も加うることなく、
鉛華不御、　　鉛華も御せず。

太りすぎもせず、やせすぎもせず、ほどよさを得ており、長すぎもせず、短かすぎもせず、丁度であり、べになどは使わず、お白粉もつけない、という意味であります。この文句は先ほどの文句から来たのですが、表現に一層工夫をこらしたので、字数はへつて、しかも内容が豊かになつております。あるいはまた、

思君如流水、　　君を思うこと流水の如し、
何時有窮已、　　いずれの時かきわまりやむことあらん。

河の流れのようにいつも君を思い続けて、決してきわまりやむことがない、という意味をこう表わしたのがあります。すると後の人が更に工夫をこらして、

問君能有幾多愁、　　問う君よく幾多の愁かあると、
恰似一江春水向東流、　　恰も似たり一江の春水東に向つて流るるに。

こういう風に作つたのです。あなたはどれぐらい深い悩ましい思いを持つておるかとお尋ねになるならば、私はこう答えるでしょう。それは、あたかもあの揚子江、しかも春の揚子江の水が滔々と東に向つて流れるが如く、無限の愁を持つておると。という意味でありまして、この表現は前文より字数は多くなつたものの、よほど具象的になつていて、深い興趣をたたえております。すなわち前文を一歩進めたものといえましょう。こういう工夫を殆んど各時代の作者が繰返しておるのです。

中国の作者たちが、いかに表現に苦心したかという例をあげましよう。唐の賈島という詩人が、月夜にそぞろ歩きをしている時、「僧は推す月下の

門」という句が思い浮かびました。月夜の美しさにうかれて、ぶら〳〵歩いておるうちに、思わず知らず歩きまわつて、友達の家の辺まで行つた。もう夜もふけておれどついでに友達を訪ねてやろうという気持になつた。この気持を「僧推月下門」の句で表わしたのですが、さて考えてみると「推す」というよりも、「敲く」とした方がよいような気もする。更に考えてみるとやはり「推す」がよいとも思う。どちらにしたものかと、手真似で推してみたり、敲いてみたりしながら、夢中になつて歩いておると、たま〳〵そこを通りかかつた行列にぶつかつて、大変叱られました。そこで実はこう〳〵いうわけで、と正直に申しましたところ、幸いにその行列の主人公が韓退之という有名な詩人でしたので、「それは敲くの方がよかろう」といつてくれました。それで賈島は「敲」にきめたという話があります。これは簡単な一字の問題ですけれども、非常に味わいが違つてくるのです。「僧推月下門」とすると、門は推せばすぐ開くのです。夜ふけに友達の家を訪ねて門がすぐ開くのは、あらかじめ通じておいたということになります。これはそうではなく、夜中に突然訪ねて行くのですから、どん〳〵敲いてやつとあけてもらうことが出来るのです。それで「敲」というところに面白味があることになるわけです。こういう一字の工夫。たつた一字でも非常に工夫をするのです。それで唐の詩人の中には、

吟成一箇字、　　吟じ成る一箇の字、
撚断数根髭、　　ひねり断つ数根の髭。

とうたつている人があります。これは詩人が、推敲する自分のみじめさを自嘲的に言つたものです。たつた一字を、髭をひねりながら工夫して、やつときまつたときには、髭が何本もひねりきられておつた、というのです。

中国の文学は、こういう風に表現に骨を折る文学ですから、その文学作品には、表現の工夫のこり固つた幾つかの特色があります。そしてその表現上の特色に、おのずからその民族の考え方の特色がうかがわれるのは、まことに興味のあることであります。そこでその表現上の特色の一つは、「意、言外に在るを貴ぶ」―表向きの言葉の裏に意味のあるのを貴ぶ、ということです。その一例をあげますと、杜甫の有名な詩に「春望」というのがあります。

國破山河在、　　國破れて山河在り、
城春草木深、　　城春にして草木深し。
感時花濺涙、　　時に感じて花にも涙をそそぎ、
恨別鳥驚心、　　別れをうらんで鳥にも心を驚かす。
烽火連三月、　　烽火三月につらなり、
家書抵萬金、　　家書萬金にあたる。
白頭搔更短、　　白頭搔くに更に短く、
渾欲不勝簪、　　すべて簪にたへざらんとす。

これは戦乱をいたんだ詩でありまして、「國破れて山河在り、城春にして草木深し」とは、國都は破壊されてしまつたが、山河は依然として存在しており、城下は春たけなわで草木が深々と茂つておるという意味です。しかし、山や河が依然として存在しておるとか、草木が深々と茂つておるとかということに重点があるのではありません。「山河在り」ということによつて、実は、もとあつた都の立派な姿が今やすつかりなくなつてしまつた、という深い悲しみをあらわそうとしておるのであり、「草木深し」ということによつて、実は、今までたくさんの人が住んでいたこの街に、今やだれ一人も住んでおらないという深い悲しみをあらわそうとしたのであります。つまり、滅びたもの、なくなつた人々に対する、詩人の深い情感がこめられておると見るべきでしよう。また、「時に感じて花にも涙をそそぎ、別れを恨んで鳥にも心を驚かす」というのも、花や鳥は非常に楽しいものでありますのに、その楽しい花にさえも涙をそそぎ、楽しい鳥にさえも胸をどきつかすということによつて、まことに悪い世の中になつたという深い歎きを込めておるわけなのであります。この詩のように言外に深い意味をもたせておるものが、高くかわれるのでありまして、いわゆる「眼光紙背に徹す」とは、こういう言外の意味を読みとることなのであります。

このことを日本の俳句などで比較してみますと、一層はつきりするでしよう。たとえば、

枯枝に烏のとまりけり秋の暮

あるいは、

古池やかわず飛び込む水の音

という句がありますが、この「枯枝に」の句は、秋の夕方の寂しさというものを、先ず感じておつて、そうして枯枝にとまつた烏というものを、その象徴として出して来たものでありますが、あるいは、たま〳〵枯枝にとまつておる烏を見まして、それから秋の夕暮の寂しさというものをしみ〴〵と感じたのか、どちらが先か、これは作者に聞いてみたければわかりませんが、いずれにしましても、秋の夕暮の寂しさを表わしておることには間違いありますまい。そこで「枯枝に烏のとまりけり秋の暮」という、この枯枝にとまつておる烏は、そのまゝ秋の夕暮と一直線です。秋の夕暮の寂しさと、枯枝にとまつておる烏の姿、それは一致しておるのです。ところが、「國破れて山河在り」の方では、「山河が在る」ということによつて、実は滅びたものを表わそうとしておるのであります。それから「古池や」の句にしましても、先ず閑寂さを感じておつて、それをかわずの古池に飛び込んだ音によつて象徴したのか、たま〳〵かわずの飛び込む音を聞いて、それによつて深い閑寂を感じたのか、どちらが先だつたのかわかりませんけれども、いずれにしましても、その閑寂さということと、かわずが古池に飛び込む音とは一致しております。ところが、この詩は、表面の言葉と表わそうとする意味とは一致しておりません。つまり意味を言外に托しておるのであります。

もちろん、中国の文学にも一直線に述べるやり方が全然ないわけではありません。たとえば唐の詩に、

古道少人行、　古道人の行くなし。

という句があります（「稀」とか「少」とかを、日本では、まれにある、少しはある、という意味につかいますけれども、漢文では、「ない」という否定の意味に用いるのです）。「古道人の行くなし」は、古道をだれも通つておらぬという寂しさを見たままに表わしたのでして、

この道を行く人もなし秋の暮

の句は、これにもとずいたのでしようが、ともかくこういう一直線の行き方もないことはないけれども、こういうのはあまり高く評価しないで、むしろ先の杜甫の詩のような行き方を高く評価するのです。つまり言外に意味をこめたものを貴ぶということになりましよう。そこでこういう風に、どんな行き方を高く評価するか、その評価の仕方によつて、その民族のものの考え方がわかるのであります。

この言外に意味をこめるということは、どんな考え方感じ方からきたのかと申しますと、「山河在り」ということは、作者の頭の中には、田畑がきちんと整い、家が立ち並んでいた、平和な時代と、山河だけがもとの姿である今とを対照して考えた結果、こういう句が生れたのでありますし、「草木深し」ということは、人がたくさん住んで街が栄えておつたときと、それがなくなつて、草木だけが茂つておる今とを対照して感じた結果、こういう句が生れたのであります。これはつまり、物事を対照的に考えるというところから、こういう表現が生れたのだといえましよう。そこでその根本問題は、対照的な考え方ということになるのでありますが、この対照的な考え方ということが、先に申しました文学表現の幾つかの特色を、形成しておるのであります。今述べました意の言外に在ることを貴ぶというやり方は、その特色の第一でありますが、次に対句という表現形式が、その対照的考え方を最も端的に表わしておることについて述べましよう。

対句ということは、どこの国の文学にも見出されましようが、しかし中国におきます対句には、わが国や西洋の対句とは違つた形と味わいとがあるのであります。中国の対句は、形も内容も完全に均斉のとれた句を並べる行き方なのであります。たとえば、

饑歳之春、幼弟不餉、　饑歳の春には幼弟にも餉せず、

穣歳之秋、疏客必食、　　穣歳（じょうさい）の秋には疏客にも必ず食はしむ。

饑饉年の春、去年収穫した僅かばかりのみのりは、はやなくなりかけている。それで自分の子供には何とかして食わせるが、その子供についでかわいそうな小さい弟、そこまでは手が及ばぬ。ところが、穣歳―豊年の秋、収穫したばかりのときには、疏客―縁故の薄い来客にも必ず食わせる、こういう意味で、これは完全な対句です。形式から申しますと、饑歳―穣歳、春―秋、幼弟―疏客、不餉―必食、こういう風に均斉のとれた形式、しかも内容も均斉がとれておる。こういうのが、中国の対句なのです。右の対句を文句の上からだけ見ますと、饑饉年の春は、幼弟にも十分食わせないということと、豊年の秋は、疏遠なお客にもうんとごちそうするということと、二つのことを並べてあります。ところで、この対句の表わそうとする中心の意味は、並べてある二つのことがらにあるのではなくて、並べてある二つのことがらを、照対的に考えることによつて、そこから生れ出る一つのことがらにあるのです。その一つのこととは何かといえば、人間の生活は結局、物質によつて支配されるものだということなのであります。言いかえれば、人間の生活は結局、物質によつて支配されるものだ、ということを表わそうとして、饑歳…と穣歳…との二つを対称的（シンメトリカル）に並べたのであります。右にあげた対句は、形式の上では、余り巧みな対句とはいえませんが、次の例は非常に巧みなものであります。

三五夜中新月色、　　三五夜中新月の色、
二千里外故人心。　　二千里外故人の心。

白楽天が遠方におる友人のことを思つて作つた詩です。これは立派な対句でありまして、三五に対するに二千、夜に対するに里、中に対するに外、を持つて来ており、新月に対するに故人、色に対するに心を持つて来ております。あたかも積木をきれいに積み重ねたような形ともいえましよう。三五夜とは十五夜です。かつて友人とともに眺めた十五夜の月を古い月と見なし、今、目の前に澄みきつておる十五夜の月を新しい月と見なしたので、新月の色といつたのです。これが第一句の意味。第二句は、あの友人は二千里のかなたで、何を思つておるであろうか、というだけのことです。ところが並べてあるこの二つの句を対照して味うと、そこに作者の友人をなつかしむ温い情が、しみ〴〵と感じられるのであります。だから白楽天は、友がなつかしくてたまらぬという心、その心をこの二句によつて表わしたのだということになります。日本でも対句ということは、ないことはありません。たとえば、平家物語の初にあります

祇園精舎の鐘の声、　　諸行無常の響あり。
沙羅雙樹の花の色、　　盛者必衰の理をあらはす。

これは一種の対句なのです。しかし、「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり」も、世の中は無常だといういう意味であり、「沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす」も、世の中は無常だということを言つておるのでありまして、こういう二つを並べても、同じことを繰返しておるだけであります。従つて二つを対照してそこからあるものを生産するという機能はありません。日本の対句はあるものを生産することのできないのが普通なのです。然るに、中国の対句は、二つのものを別々に並べて、そうしてそれが対照されて、そこから夢の世界を生み出すというのが本質なのです。三五夜中と二千里外との対句、これと祇園精舎の対句とを比較しましたが、少し縁が遠いから無理かも知れませんので、人生無常ということを言つた中国の対句と祇園精舎の対句とを比較してみましよう。

天地者萬物之逆旅、　　天地は萬物の逆旅にして、
光除者百代之過客、　　光除は百代の過客なり。

これも皆さんお若い頃に読まれたかと思いますが、天地というものは萬物の宿屋だ。その宿屋に萬物が宿つては帰つて行き、宿つては帰つて行きする。光陰というのは日月です。運行する日月というものは、百代―永久の時代におけるお客さんだ。永久の時間があつて、そこに日月があつて、今日がおいでになつたかと思うと、今月がおいでになつたりして、今年は去つてしま

う。しかし永久の時間はそのままある。天地は無限大の空間で、その無限大の宿にいろ〳〵な萬物がお宿りになり、さつさと行つてしまう。また無限大の時間の流れに日月というものがおいでになつては過ぎて行く。即ち一つは空間的、一つは時間的、この二つのことを並べて、対句になつておるのですが、これは何を表わしておるかというと、この二句を対照して考えるときに、われ〳〵人間というものは、空間的に見ても、この大きな宿屋の中の極めて小さい一部に過ぎない。また、われ〳〵の生命というものは、時間の支配、制限を受けておるから、永久の時間から考えれば、まことは些細な一人のお客に過ぎない。人生は非常に無常なものだということを言い表わしておるのであります。つまり、祇園精舎の鐘の声の趣旨と結局は同じことなのです。同じことだけれども、祇園精舎の対句は、無常のことを繰返していうに過ぎないのに対して、これは二つの違つた空間と時間とを並べただけで、表面には人生のはかなさということを言わないで、この二つのことを併せ考えたときに、人生無常ということを生産するのであります。

こういうやり方、こういう文学表現が発達したのは、結局彼ら民族のものの考え方が、そういう風になつておるからなのです。このような対句の発達をみたのは、その言語の性質に因るのだとも言えましようけれども、そういう性質の言語を使うということは、結局それは言語だけの問題でなくて、考え方の問題が根本ではありますまいか。そういう風にものを考えるから、そういう言語になる。言語のために考えが支配されるのではなくて、民族独自の考え方が、民族独自の言語を生み出しておるのだと思います。彼らのものの考え方は、ものを一直線に考えることをしない。すなわち、前後左右をふり返りながら、古今上下を顧みながら進むという考え方、ふり返りながら、物事を引合いに出して並べては考え、並べては考える、そういう考え方をするのだと思います。並べながら考えるということは、これは結局単独のものを単独のものとして引きちぎつてきて、そればかりに考えを打ち込むのではないのであつて、言いかえると、全体の中における一部分として考えるということなのです。これは絵についても同じことがいえましよう。油絵で林檎を描くとしますと、主として林檎というものに全力を集注する。林檎の色、形というものに全力を集注してぬりつぶし、そうして背景か何かをつけ加える。これが油絵の描き方であります。東洋の絵は、林檎を描くか花を描くかしましても、画面が宇宙なんです。この画面を非常に大事にする。画面そのものがはや芸術なのです。全宇宙を画面に象徴し、その全宇宙における一部として、全体の中の花なら花を線でくぎりとる。そしてそのくぎりとつた形だけが大切なのではなく、この空間の一紙の広さとの関係、あるいは紙の色つやとの関係など考慮する。全体の一部分としてよく調和させながら描くというのが東洋画の行き方なのです。これは、すべて物事を一直線に考えないで、配合—いろ〳〵なものとの関係において考えるということになるわけであります。天地ということばは、天と地だけの意味ではなく、天と地とを対照的に考えて、空間の広さということを表わしておるのであります。日月でも同じことです。太陽と月とをたゞ二つ並べておるのではなく、太陽と月とを並べることによつて、時間の悠久さというものを表わしておるのであります。陰陽でもそうです。陰のものと陽のものという意味ではありませんで、陰というものと陽というものを対照的に考えて、宇宙に充満しておるところの一つの気を表わします。男女も男と女というだけのことではなく、全人類ということなのです。大抵こういう行き方になつております。

もちろん中国人だつて直線的にものを考えることが、全然ないわけではありません。そのことにばかり食い入つて、真相をつきとめようとする学派がなかつたわけではありません。しかしそういうものは大体からいうと、曲士—へりくつやとか蔽われた者とかいわれて、あたり前の行き方とはみなされておりません。一直線にのみ考える代表的なものは、名家といわれた連中がそれです。

一尺之棰、日取其半、萬世不竭。　一尺のむち、日にその半をとらば萬世つきず。

一尺のむちを、毎日つぎ〳〵と半分づつ折つて行けば、永久に折りつゞけられるというのです。なるほど線は無限の点が連続せるものと見られるから、その立場からのみ考えればこんなことも言えましょう。この考え方は、兎がいかに追つかけても、永久に亀を追い越すことはできないという、あの西洋の昔の理論と同じであります。こういう理論をふりまわすのが、いわゆる詭弁です。しかしこれなどはまだいい方でありまして、この行き方のひどいのは、

卵有毛、鶏三足。　　卵に毛あり、鶏に三足あり。

卵に毛ありとは、すべてものには初めがある。鶏が生れながらに毛がはえているのは、生れるときに突然はえるのではない。鶏の元の卵にちゃんと毛があるのだ。こういう議論です。鶏に三足ありとは、およそものは、二点で支えられなければ安定しない。しかるに鶏の歩くときを見るに、一本の脚は地に着いておるけれども、一本の脚は必ず地から離れておる。それなのに鶏が倒れないのは、もう一本われ〳〵の肉眼に見えない脚があつて、それと二本で支えるからだ。とまあ、そんな調子です。

こういう風にある点だけに限定して考えますと、どんなりくつでもきつと成り立つものなのです。つまりりくつというものは重宝なもので、元来通るようにできておるのであります。そこで問題は、一見すじの通つたりくつが、果して物事の真相を得ておるかどうかということにあるのでして、この点が非常に大切なのであります。ところがわれ〳〵もとかくその真相をえておるかどうかということはとんと忘れて、ひたすら筋が通るか通らぬかということばかり問題にしがちであります。そういうやり方を、中国人はすでに二千何百年もの昔、「よく人の口に勝つも、人の心を服せしむる能わざるもの」と言つて笑つております。ともかく中国では、ものごとを一直線に考えるしかたが、全然なかつたわけではないけれども、本筋の考え方としては、発達しませんでした。そのことが、天体観測のすべを非常に古くから知つていたり、二千年も昔、地震計を作つた人もあつたりしたにもかゝわらず、科学が進歩しなかつた一つの原因でありましょう。こういうわけで、さつき申した。左右前後をふり返りふり返り、そうしてそこからいいものを見出そうとする、そういう考え方が、彼の民族の特色かと思います。それで政治でいうならば、重慶の政府もつくり、汪政府もつくり、二つ並べて考えあわせながら何とか進路を切り開いて行こうとしたことも、かゝる民族本来の考え方とつながつておるともいえましょう。ともかくそういう考え方が文学の表現において、対句という構成になつて来たのであります。

それから、もう一つの特色は譬喩です。譬喩もどこの国にもあるのでして何も中国特有のものでないことは言うに及びませんが、中国の文学ほど盛んに使う国は、おそらくないでありましょう。先ずわが国の譬喩を例にとりましょう。紅葉を「血の色をした紅葉」というのと、「赤い紅葉」というのと、意味の上ではどちらも同じことなのですが、この二つを比べてどちらがおもしろいかというと、「赤い紅葉」といいましても、赤にはいろ〳〵ありましてはつきりしません。ところが「血の色をした紅葉」といいますと、何ともいえぬきれいな色が、目の前に現われて来ます。もと〳〵紅葉の色は非常に複雑な赤さですが、それをこういう風に赤い、ああいう風に赤いと説明しなくても、「血の色をした」というだけで、ぴつたりと印象がはつきりいたします。山に雪の積つている風景をいうのでも、「白い峯」というよりも「白銀の峯」というと、何ともいえぬ渋味のある、ちか〳〵と光つて落着きのある白い景色が、ぴつたりと印象づけられるのであります。これが譬喩の効能なのです。譬喩の効能は二つの方面から考えられるのでありまして、たとえを持つて来ることによつて、理知的なことを相手にたやすく理解させる。これが一つ。もう一つはおもしろさをおぼえさせ美的感覚を起させることです。

この譬喩ということが、中国の文学では盛んに利用されておるのであります。たとえば「朝三暮四」という言葉がありますが、そのおこりはこうです。ある人が、猿を好んで沢山飼つており、とちの実を食わせておいたので

すが、食糧事情が悪くなつたので、猿を集めて「困つたことには食物が足らんようになつたから、朝は三つでがまんしてもらいたい。そのかわり夕方は四つやるから。」といつたところ、猿どもは非常に怒つた。そこで「では朝は四つ夕方は三つやることにしよう。」といつたら皆満足した。それで朝三暮四という言葉ができたのですが、俸給を上げてやる、そうして税金でごそつと引くのは、この朝三暮四のやり方であります（笑声）。ところでこの朝三暮四の話は何を表わしておるかというと、本質においては何もかわらぬのに、人間というやつはばかだから、目先のことにこだわつて問題をおこすということをたとえておるのであります。結局三つと四つは七つであつて、七つはどうしてもかわらぬのに、三つ四つということにこだわつて争う猿どもと同じことだというのです。渾沌王の話があります。この王様は、目も鼻も口も耳もない、のつぺらぼうの顔をしていたので、友人たちが非常に気の毒がつて何とかしてやろうと、親切にいろ〳〵苦心して、目鼻口耳を作つてやつたところが、渾沌王は死んでしまつた。いらぬせわをしてくれたから死んでしまつた。これは何をいみしておるかというと、世の中というものは、ごた〳〵としたことをやらんでもよいのだ。ごた〳〵と小細工をやるから純粋の世界がこわれてしまうのだということを暗示しておるのです。これらは理知的な譬喩の用法でありますが、また情趣、味わいを深めるための譬喩、

玉容寂寞涙欄干、　　玉容寂寞として涙欄干たり、
梨花一枝春帯雨、　　梨花一枝春雨を帯ぶ。

これは唐の玄宗皇帝が、愛しておつた楊貴妃を失つたとき、日夜煩悶にたえないで、使者をやつて楊貴妃の魂を訪問させた。そのときに出て来た楊貴妃の姿を表わした言葉なのです。きれいなかんばせの人が泣いておる。そのさまは、ちようど白い梨の花が一枝、春の雨にぬれたようなおもむきだつたという表現であります。玉容―玉の如く美しい姿―がすでに譬喩ですが、それにしつとりと春雨にぬれた白い梨の花を持つて来たために、「玉容」が一層美化され、情趣深くなるのであります。

こういう譬喩が盛んに行われたのでありますが、譬喩ということの機能は何であるかと申すと、これまた対照的の考え方感じ方をさせることなのであります。女の姿と春雨にぬれた梨花の姿とを照し合はせることによつて、豊かな情趣が生み出されるのであります。また理知的な譬喩ならば、照し合はせることによつて、豊かな理解が生み出されるのであります。つまり譬喩は、二つのものを対照することによつて、別な幽玄の世界を作り出すはたらきをするといえましよう。この譬喩ということはだれでも知つているものを持つて来なければ効果がないのです。だれでも知つているものを持つて来て対照させるというところに譬喩の特色があるのです。

中国の文学における表現上のもう一つの特色は、盛んに典故を使うことであります。もちろん典故の利用も、中国だけの専売ではありません。しかし、中国の文学ほど盛んに使つたものは、恐らく他に見られないでしよう。私はある雑誌にも書いたことがあるのですが、私の教え子の一人で長く満洲にいましたのが、この戦争後引揚げて来ました。大平洋戦争の始まつた直後のこと、その人が平素親しくしておつた一中国人に向つて、「今度の日本の出方をどう思うか、率直に話してほしい。」と言つたところ、その中国人はたゞ「君子固窮」の四言をもつて答えたそうです。これは、論語に「君子固窮、小人窮斯濫矣」とある文句の上の四字だけをとつたのです。論語のいみは、「君子だつてどたんばに追いつめられることがある。しかしどんなに追いつめられても、決して悪いことはしない。ところが小人は追いつめられると、すぐむちゃをする」ということなのです。そこでその中国人が、「君子固窮」と四字いつたのは、どこに狙いがあるかといえば、論語の文句の下の部分、「小人窮斯濫矣」にあつたのでして、それによつて日本を批評したわけなのです。

このように典故の利用ということは、自分の考えを率直に述べないで、古典のかげにかくれて述べるというやり方であります。だから自分のいうことに非常に権威を持たせることが出来ますとともに、相手におだやかにひゞく

のです。しかし典故の効能はたゞそれだけではありません。また相手に非常に深く考えさせるという効能もあり、またときにユーモラスを感じさせることができるなど、いろ〳〵な場合があります。昔、裴楷という人は、人からお金をもらつては、それで貧民の救済をやるので、友人が裴楷に向つて、「自分のもつているものを人に与えるならば話がわかるが、もらつて来て与えるのはおかしいじゃないか」と言いますと、裴楷は答えて、「損有餘、補不足、天之道也」（餘り有るを損して、足らざるを補うは、天の道なり）と言いました。あり餘るところから、取つて来て足らないところにやるのは天の道だ。こういつたのです。これは非常にユーモアの意味で言つたのですが、これは拠りどころがあるのです。老子の言葉に、「天之道、損有餘、而補不足、人之道、則不然、損不足、而奉有餘」（天の道は餘り有るを損して足らざるを補う。人の道は然らず。足らざるを損して餘り有るに奉ず）とあるのがそれです。あり餘るものから取つて来て、足らないものに補つてやるのが天の道だ。ところが人間はそうではなく、足らないものから取り上げて、ありあまるところへやる。こういう意味であります。裴楷はこれを持ち出して、「おれは天の道を行うのだよ」と皮肉つたのです。

この典故の利用は、相手に深い暗示を与えます。たとえば、今引きました「損有餘、補不足、天之道也」とこれだけ言つたので、相手は老子の言葉全体を思い浮かべたわけですし、さきの一中国人が、「君子固窮」といつただけで、こちらは、「小人窮斯濫矣」までも思い出します。だから作品の中に典故を利用してありますと、読者は何ら拘束されずに、ごく自由な気持で、その簡単な言葉によつて、複雑な背景を思い浮かべますから、自然に作品の解釈鑑賞を非常に豊富にすることが出来るわけであります。つまり作品を立体的に、奥ゆき深く、解釈し鑑賞することができると言えましょう。そこが、典故のもつ文芸的効果の大切な点であります。ただ問題は、読者がこれを知つておらなければならぬ、予備知識がなければならぬということです。譬喩はだれでも知つていることを持つて来て効果をあげるのですが、典故はそうでなく予備知識のあるものだけがわかる使い方なのです。そこに貴族的というか特権的というか、一つの困難があるわけであります。

ところで典故の利用とはどういうことかと申せばその原理に於ては譬喩と通ずるので、むしろ譬喩の一種とも言えましようが、その詳論はしばらくおくとして、ともかく、過去の事実と今の事実とを照し合はせて考えることなのです。たとえば、今の裴楷の話で申しますと、貧民を救うことは現在です。この現在のことと、老子のいつた過去のこととを照し合はせて考えるのです。一中国人が、「君子固窮」と言つたのは、現在のことを論語の文句と照し合せて考えるのです。それはつまるところ対照的の考え方だと言えましよう。さきに述べました意の言外にあるを貴ぶとか、対句とか、譬喩とかは二つのことを対照して、そこから、もう一つの新しい意味を生産するのが普通ですが、この典故の場合は、どちらかと言えば、古典に帰一する色彩の濃いのが普通です。しかしいずれにしましても、これらのやり方は皆対照的にものごとを考えたり感じたりして、それから一つの世界を生み出すという点は共通しておるのであります。

さて こゝで、ものごとを対照的に扱つてそこから別の一つの世界を生み出すとは、一体どんな意味をもつのかについて、考えておく必要があります。二つのものごとを対照して考えたり感じたりするとは、その二つのそれ〴〵の立場において、その特色を発揮させ、また認識することにほかなりません。そしてその対照によつて、別の世界を生み出すとは、これ即ち融合の境地を出現させることではありますまいか。中国の文学において、少くとも過去の中国の文学において、今まで述べたような表現上の特色があるとすれば、その民族には融合の境地を求めようとする一つの性格があると推断することも、あるいは許されるかと思います。

以上大変ごた〳〵したことを申しましたが、世の中のすべてのことが、対立の姿においてのみ考えられるならば、それはいつまでもへりくつの泥仕合に終始して、恰もかの二本の平行線が無限につゞくが如く、未来永劫、融合

の境地に達することが出来ないでありましょう。まあ私のつまらぬ話も、対照的にお考えくださつて、何か皆様方が融合の世界を生み出してくださるように…。御清聴を感謝いたします。（拍手）

THE SINAGAKU-KENKYU

No. 13 September 1955

ABSTRACTS OF ESSAYS

Creative Harmony in Chinese Literature

Rokuro Shiba

In Chinese literature the introduction of novel materials is usually less important than to take up again existing materials and to give them a finer expression. The result is that more effort was directed to the way of xpression rather than to contents. The remarkable features are the favourite use of (1) antithesis, (2) similie, and (3) authentic precedent. These rhetorics are originated in the Chinese minds of thinking in contrast. To set A against B is to produce C, the union of A and B.

We have seen in the above that the literature of Chinese people is full of such rhetorics as antithesis, similie, and authentic precedent, based upon their comparative way of thinking; so it may be called a literature depicting the world of harmony.